予言

親愛なる友よ

君がこのノートを読む時、すでに100年が過ぎ去っているかもしれない。
私は、友人として、そして兄弟として君を迎えよう。なぜなら私も、私自身の時代において君と同様、「マスク・オブ・シャドウ」という心の重荷に耐えたからだ。

だからこそ知っていて欲しい。
それを通り抜けるための通路、「パス・オブ・シャドウ」は私が構成した。そう、デッドサイドとして知られる場所を通り抜けるための道だ。
ただし、我々にとってそうであるように、吐しゃ物を吐き出す者達にとってもそれは同様だ。
この領域では、力だけがそれを可能にし、且つ妨害なしにここを通り抜けることはできない。

私は、パワーを秘めた数多くの古代の道具、それを私の時代に目録にまとめた。そしてそれらのいくつかは、小部屋の中にある。
しかし、私はこの仕事が不完全なままになってしまうことを恐れた。
暗黒の種子が、100年の間にその力を増し、この領域に入り込むだろう事を予感していた。
ゆえに私は、パス・オブ・シャドウを封印しなくてはならなかった。古代の道具が、やつ等、悪の手に落ちることを恐れたからだ。

これらの通路を完璧に閉じるための作業は、想像を絶する労力を必要とした。
だから、外側にあるゲートを、通路の内側の、より深いところにあるものほど強く安全に閉じることができなかったことを懸念する。
ゆえに知って欲しい。君がここへ来るために要した力、それよりも、遥かに重大なる力が前進するためには必要となるだろう。

さらに、これら古代の道具の目録とともに、一言加えておく。
その場所の発見については、強大なる預言者ロアによってもたらされた古代の予言、「レ・コース・ド・プロフェス」の中に隠されている。

私は、レ・コースによって語られるかもしれないその日を、私が感じるのと同様に、暗黒がそれを知ることを恐れていた。だが運命は、私自身に暗黒に挑戦しないことを義務付けたのだ。
代りに、通路を安全に閉じる事。それが私の果たすべき役割りとなった。
予言されたその日、そして悪が再び真の姿を現した時、それらの形見は再びその覆いを脱ぎ、そこへと至る道は開かれることだろう。

君の幸運を祈る、マキシム. St. ジェームス　先代シャドウマン より

<marshmallow's note: I did not include the text from Les Cartes due to the fact that they are mainly pictures>